

保育者養成における「物語る」ものとしての 実践記録の有効性を探る

— 『保育の体験と思索』と『ウォーリーの物語』を教材として—

ポーター 倫子

はじめに

今回の研究では、実践記録の中でも最近注目されている「物語る」ものとしての記録が、保育者を目指す学生らの子ども理解や保育理解にいかに関係する教材となりうるかについて検討したい。

1. 子どもを理解すること

保育者養成の中心課題は、子どもを知ることである。それは、自分を子どもの外において理解するような科学的、客観的な理解ではなく、子どもの世界に入り込み、関わりを持つ中で知る内面性の理解である。このような理解は、子どもと遊んだり、生活を共にする実習経験の中で培われていくことがある。子どもを抱いたり、手をつないだりした時の感触や匂い、いっしょに動いてみることによって知る子どものリズムや視界などによって、子どもを体験的に知るようになっていく。

最近、子ども理解のあり方として関係論的視点が非常に重要であることが指摘されている⁽¹⁾。これは、子どもを孤立している個としてその行動だけを見るのではなく、その周りがかかわりを持つ保育者や他の子どもたちの行動を含めて見ることの必要性である。子どもと保育者の関係、その子どもが含まれている共同体との関係などを明らかにしていくことによって、子どもを理解していくのである。

斎藤（1995）は、人が人を見る視点には3種類の見方があると述べる。「他者のみを見る視点」（自分と切り離れた相手だけを見ていて、見る自分には気づかない見方）、「自他の関係を見る視点」（相手を見ると同時に、相手と切り離せない見ている自分の特性にも気づく見方）、「自己のみを見る視点」（相手を見ているようで実はそれとは切り離して、自分にしか注目していないナルシスト的見方）である。実際の保育行為では、「自他の関係を見る視点」すなわち対象としている子どもをどうとらえているかという自分との関係が重要な意味を持つ。自分の価値観や見方が保育行為に影響しているため、それらを自覚化していくことが子どもを理解していくことにつながると考える。

このように子どもの行動を理解していくためには、その行動だけを単独的に見るのではなく、周りとの関係やそれに関わっている保育者や研究者の主観を含めることによって読みとろうと

する試みが最近なされている¹⁹⁾。これは、保育を「物語る」という方法である。

子どもと普段接する機会の少ない学生にとっては、学んだ理論を具体的な子どもの姿へイメージづけるエピソードの存在が不可欠のように思う。例えば、入園したばかりの子どもたちの不安をどのように軽減するかということは、理論としていくつかの援助法を提示したとしても、実際の保育の場面はもっと複雑で予想できないものである。むしろその保育者の保育行為の根拠となる考えが織り込まれたエピソードは、学生にとって納得のいくものであり、エピソードを読むことにより、気持ちの上でその保育の中に参加することにもなると考えられる。

さらにエピソードは記憶に残りやすいという利点がある。筆者自身も講義を聞いたときなど、エピソードを通してその人の考えを記憶にどとめることが多い。またそのエピソードを別の人に語ることによって、学んだことを相手に伝達すると同時に再確認していくこともできると考える。

本研究では、保育者養成における教授法の一環として、「物語る」ものとしての実践記録が、学生らの子ども理解や保育理解を深めることができるのではないかと仮説を立て、研究を進めることとする。

II. 実践を「物語る」ことの意義

河合隼雄氏(1993)は『物語と人間の科学』の中で、心理療法は物語るということと関係していると述べる。まず「物語る」というのは、事実と事実をつなぐ筋(ストーリー)を持っているものとする。そうすると語る人は自分で筋をつけているため、その人の考えや価値観などが、事実と事実の間に入ってくるわけである。どの事実とどの事実をつなぎあわせるか、どう意味を読み取っていくかというように、語り手の主観が物語の中に入ってくる。また物語を聞く人も、心を動かしながら自分の中に新たな物語を創っているのである。河合氏は事例研究の中で「私」という主観を入れつつ、普遍性のある物語をつくっていくためには、その人その人の「語り」を戦わせていくことが必要であると述べている。すなわち、それぞれの物語を出し合い、いろいろな見方から論じ、実践の場に返し再検討することで、人間理解が深まると考えられる。

教育学者の佐藤氏(1995)は、多くの教室を観察、記録してきた中で、そこで起こる「出来事」を発見し、省察していくことの大切さを述べている。「出来事」とは、意図や計画から逸脱した一回性を特徴とするものとする。これまでの発達研究の中では、一般化や抽象化を重んじるゆえに、「出来事」は消去されてきたと述べる。しかし「出来事」は、教師や観察者の認識を改め、成長を続けていくための「反省的实践」であると言う。佐藤氏は「出来事」の省察と批評を促進する教育実践の記述と表現の様式の特徴を次のようにまとめている。1) その教室の状況(文脈)の個別性を尊重(固有名詞をもった特定の状況の風景、個人名をもった教師と子どもが登場する)、2) 一人称による記述。「主観性」を尊重し、その「主観性」の反省が奨励される、3) 「出来事」の記述として「物語性」が求められ、「語り(narrative)」の様式をと

る、である。

保育の実践研究の中でも「物語る」ことが試みられている。大豆生（1994）は保育を「物語る」ことの意義について1）子どもの行為を読み取るための手掛かりとなる保育の全体性が捉えられること、2）自分がどのように子どもの姿を読み取ったかという「私の見方」が自覚化されること、3）子どもとの関係の中で自分自身の関わりを反省的に考察しそのかかわりをさらに望ましいものにしていこうとすること、と述べる。また保育者が保育を語るのは、子どもと関わる時に生じる迷い、ためらい、悩み、苦しみなどの「痛み」がきっかけであるとする。大豆生らのグループ（1995）は、研究会の中でそれぞれが自分の保育実践のエピソードを語る方法を取っている。VTRで収録したエピソードを物語りながら、参加者らの検討、解釈をクロスさせるという方法である。その中で、物語の解釈は保育実践への関与のポジションや関心・枠組み、時間的や流れによって変わってくることを指摘している。このように立場や視点の異なる参加者が交流し、物語りを共に創っていく過程の中で、子どもや保育を見る目が深まっていく。

本研究では、「物語る」ものとしての実践記録として、津守真著の『保育の体験と思索』とヴィヴィアン・ペリリー著の『ウォーリーの物語』を選択した。それぞれの本を選んだ理由は、次の章で述べる。

Ⅲ. 研究 方 法

1. 研 究 対 象

北陸学院短期大学保育科1年（114名）

2. 研 究 期 間

1995年4月～7月

3. 研 究 方 法

筆者が担当する「保育原理Ⅰ」（1年・通年）の課題図書として、前期には『ウォーリーの物語』及び『保育の体験と思索』、後期には『保育の体験と思索』のみを読ませた。それぞれ好きな箇所（テーマ）を2節から3節選び、感想文を提出してもらった。今回は前期分の結果を分析の対象とする。読み方として、全体を通読したり、一人の子どもの足取りを追って読む方法などがあるが³⁾、今年度は最初の試みとして興味のある箇所を選ばせた。課題を与える前に、それぞれのテキストより1、2節選び、簡単な説明を加えて紹介した。

4. 教材について

A. 『保育の体験と思索』

このテキストは、筆者が幼稚園、家庭、特殊学校の現場で子どもと生活を共にしながら体験した保育の記録である。幼稚園に入園してから小学校に入学するまでの3年間の子どもの経験世界をまとめたもので、日常生活の中に表れる子どもの行為の意味、遊びを生み出し支えるための保育者のはたらき、幼児期に獲得される人間の基本的体験等について深い洞察を与えてく

れる。また、従来の科学的、客観的な子ども理解から、子どもの内面世界に入り込んだ理解へと180度転回した保育研究者としての筆者の歩みを示すものでもある。

「子どもとかかわる保育の体験によってとらえた子どもの行為は、自分自身の生きた世界の総体と、他である子どもの生きた世界の総体との境界にあらわれる現象である」という筆者の言葉にあるように、子どもの行為は、そこにたずさわっている自分を見つめることなしに語ることはできないのである。この意味で津守氏は保育を語ることによって、たゆまない自己洞察を続けながら子どもの世界を探究しようとした実践者と言えるであろう。

友定(1991)は、津守氏の著作が保育者にとって魅力的なのは、感覚的・直観的な幼児の世界認識の方法に密着して、それを大人の思考言語を用いて記述しえた点にあるのではないかと述べる。津守氏は『子ども学のはじまり』の中で、「感じる」力を働かせて子どもの世界に入るにより、その世界を見ることがある程度可能であると述べている。この力は、知覚を敏感にするというよりも、相手の世界の波動に合わせてこちらの感じ方を変えていく自由さであると言う。彼の著書に触れることにより、学生が子どもの中に存在する世界を感覚的に発見し、その世界を感じ取っていくことの重要性に気づいていくのではないかと推察する。

B. 『ウォーリーの物語』

この本の作者ヴィヴィアン・ペイリーは、長年小学校や幼稚園の現場で数々の実践を積み重ね、その記録を出版してきた女性である。子どもたちと教師が織りなす教室の「出来事」を生き生きと紹介しながら、子どもの内的世界とその成長に携わる教師の役割を豊かに表現している。

ペイリーの実践を日本に紹介した佐藤学氏の「子どもの想像的世界を描きだした最高の実践記録をお届けしよう」(p.317)との巻末の言葉にあるように、その教室の世界は、子どもの創りだすファンタジーで満ちあふれている。しかしペイリーの教室の中では、ファンタジーは単なる夢物語ではなく、現実の世界で物事を探究していく思考の営みであり、自己のアイデンティティを探り出し他者との絆を深める過程として重要な意味を持っている。ファンタジーは、子どもが成長する力・生きる力の支えであり、源となっていることをこの本は教えてくれる。

ペイリーは、教師の役割として、教師の考えを一方向的に教え込むやり方ではなく、「私が考えることを子どもたちに告げることをやめて、子ども達が考える内容と過程のほうに、より好奇心を注いだ」(p.ii)と述べている。子どもたち一人ひとりの見方、論理に耳を傾け、それらの関連性を理解できるように手助けするのである。それぞれの子どもたちが自分の考えを表し、お互いに理解し合えるよう支え、共に育ち合っていけるよう導いていく新しい教師の役割を示している。

さらにペイリーは、教室での出来事を「語り(narrative)」の様式で表現している。大場幸夫氏(1995)はこの本を「語るべき子どもウォーリーと出会うことができた保育者ペイリーの気づきの記録である」と解釈している。すなわち彼女にとって、語りたと思った子どもに出会えたことに意味があり、語ることによって保育者としての自分を省察し続ける過程をもてたの

である。これは、彼女自身の教師としての成長記録なのである。

Ⅳ. 研究結果

1. 『保育の体験と思索』

学生たちに選ばれたテーマの多いものの順では、「おとなの世界と子どもの世界」(16人)、「四歳の誕生日」(13人)、「幼稚園にいきたくない」(13人)、「食べさせること」(12人)であった。まず最初に、一人の学生の感想文を紹介する。これは学生114人の中で比較的多く見られた感想である。

[感想1]

私も昔保育園のピアノの横でみんなの遊んでいる姿を見ていたことがあるのを思い出しました。何故保育園に来なくちゃ行けないんだろう。お母さんの傍らにいたいなあと思っていたように思います⁹⁾。

子どもの心の中にも、心を守るアンテナがついていて、それをとつても敏感に動かして少しずつ電波を合わせていつているのではないかなあと思いました⁹⁾。

幼稚園や保育園がきちんと合う電波を流してあげられるなら、どんな子どもでもすぐなじめるように思いました。みんなが違うアンテナを持っているのだから、それぞれに合うのは大変なことかもしれない。でもそれは先生ががんばらなければならないことだと思います⁹⁾。

なぜなら、一番心が豊かで、やわらかくて、何のワクもなく、何でも受け入れられる時は幼児期だろうと思うからです。その時に感じたことは、いつでも感覚で覚えていると思うし、その時にどれだけ感じるのかで将来のふんばりのきき方が随分違うと思うし、思春期などの辛い時に幸せを思い出してくれるような保育園や幼稚園であればいいなと思います⁹⁾。

(1)は本の中に登場する子どもに重ね合わせて自分の幼少体験を思い出している。(2)は子どもにそれぞれの思いや葛藤があること、(3)はそれぞれの子どもの思いに即してあげられるような保育者のはたらきについて述べている。(4)は幼児期の特性について考察し、そのことが子どもの将来についてどのような意味を持つかについて推測している。

では、学生らの感想を具体的に見ていくために、a. 幼少体験の回想、b. 子どもの内面性の理解、c. 子どもの世界、d. おとなのかかわり、の4つの観点で整理し、順番に代表的なものを紹介していくこととする。なお感想文の後の括弧内は、特定のテーマについての感想である場合、それを示している。

a. 幼少体験の回想

[感想2] 「いい子」というのは、先生の話をよく聞いて、親の言うこともよく聞いて、お友達の気持ちを理解してあげること、というようなことを考える。そういえば小さい頃、いい子になりたかった。いい子になって、先生からも友達からもみんなに好かれたかった。けれどそういうことを気にしているうちに、自分の個性がなくなったように思う。嫌われたくないから、人のことばかり気にしているうちに、自分の気持ちを押しやることを無意識のうちにしていた。(いい子になること)

[感想3] 私も保育園時代の大きな思い出として、園に行きたくなかったということがある。幼稚園に行きたくない子どもに出会うのはごくあたりまえのことだということが、この本を読んで分かった。幼稚園が子どもにとって自分らしく生活できる場所であれば、行きたくない子どもはいないはず。・
・父の転勤で石川に来て、言葉も習慣も違う、しかもみんな知らない人ばかりということもあり、保育園に行くのが辛くてたまらなかった。今思うと、保育園をその子にとって生活しやすい楽しい場所にしてあげることが必要だと思う。

[感想4] 私も特に恥ずかしいことがあった日の夜は、その事が頭の中に浮かんで来て、なかなか眠れないことがよくあった。でも親には、何度も起きることを怒られ、分かってもらえなくてとても悔しかった。でも誰かの傍らにいととても安心できたので、子どもにとって不安な心を誰かに包み込んで欲しいのだと思う。大人になるとこんな気持ちを忘れてしまいがちなので、ずっと忘れないでいようと思う。

感想2は、幼少の頃「いい子」にならなければとのプレッシャにとらわれ、自分らしさを発揮できなかったという告白文である。感想3は園に行きたくなかったこと、感想4は夜眠れなかったことのそれぞれの心境を表している。一見おとなから問題とされるようなこれらの行動の背後には、自分なりの理由があったことを感じ取っている。

[感想5] 「努力の後に指と指とが触れ合う体験は、言語で理解する以上に、人間相互のつながりを感じさせるものである」という部分にとっても共感した。子どもの頃、私も友達と砂山を作ってトンネルを掘っていたが、始めはトンネルの中に入ってしまって上から見えない手が、中でどうやってつながって入るのだろうと不思議に思った。なかなか水平につながらなかったけど、つながった時は嬉しかった。今もしトンネルを作ったら、小さい頃と違って容易につながることができると思うが、指と指とが触れ合う喜びはあの頃と同じように感じられると思う。(穴をつなげる)

[感想6] 私は小さい頃、よく土や砂に穴を掘って水を流したりしながら遊んでいたことを覚えている。水が土や砂にしみ込んでいく瞬間が、何とも言えないほどの快感だった。

[感想7] 「一枚の花びらを一つの生き物としてふれている」私も昔こんな感じだったなあ。とても懐かしい気分だ。大人になるにつれて鈍感、無神経になっている気がする。たまに童心に戻ってちょっとしたことに胸弾ませワクワクドキドキ感動するのもいいと思う。最近花びらどころか、花さえもじっくり見ていない。(花びら)

感想5、6、7は小さい頃の記憶が感覚として残っている例である。これらは津守氏の描写する子どもの感じている世界が、読み手の感覚を蘇らせたように思われる。子どもが体感していることを子どもの視点でいきいきと表す記述は、読み手に対して子どもの世界への憧憧を抱かせるようである。

b. 子どもの内面性の理解

[感想8] 子どもが何気なく遊んでいても、それは子どもにとって何か意味があるということが分かった。このことを頭において観察すると、ただ可愛いと思うだけでなくいろいろな発見ができるだろう。子どもとは単純なようでとても奥の深いものだった。(動くもの)

[感想9] 大人にとって当然のことも、子どもにとってはとても貴重な学習の場であることに気づかなければならない。そして子どもたちがそこから何を体験し、学びとっているかをよく見守らなければならぬ。子どもたちが遊んでいる姿をかわいいと思いながら見るだけではいけないのだと知った。(袋を割ること)

[感想10] 周囲のみんなに溶け込めなかったり、乱暴な行動をとったりする場合、すぐに注意するといった行動を我々はとりがちだが、そうではなくその子の心境をよく考えてあげることが大切なのだと思う。(はみ出る子どもを共通の遊びにつなぎとめること)

[感想11] 子どもも子どもなりに考えているのだなあということがこの本で分かった。子どもも一人の人間であるのだから、同じ高さで向き合っていくべきだと思った。一人一人の子どものリズムに対して考えられる保母になりたい。(幼稚園にいきたくない)

[感想12] 子どもが何をしたいのか、何を考えているのかを理解するのは困難そうだけど、それは大人の観念の中だけで理解しようとするからで、子どもの心は大人の心よりもきつとずっと大きいのだということを知っていればわかるものなのだと思う。大人が自分の観念を押し切るのではなく、子どもの大きな考え方を引き出してやるのが大切だと思った。(おとなの世界と子どもの世界)

感想8から12は、子どもの行動には全て意味があり、子どもの視座でその行動を読み取っていくことの大切さに気づいた感想である。感想9は、おとなから見て何気ない行動でも子どもにとって貴重な学習の場であること、感想11は、子どもを一人の人間としてとらえ同じ高さで向き合っていく必要があることに気づいている。感想12は、子どもを理解する場合、おとなの観念にとらわれずむしろ子どもの考え方に対して心を開いていくべきであると述べている。

c. 子どもの世界

[感想13] 子どもは神様だと思った。それは私たちが束縛されて窒息しそうな時、悩んでいる時どうしようもない時、そんな心をいやしてくれたり、現実の苦しい世界を忘れさせてくれるからである。子どもは自然と一体化することにより、異次元の世界に入り込んでしまうのだと思った。また現実の世界に戻ってきても、異次元の世界から持ってきたものがあれば、いつも心の中にその世界が生きているのだと思う。・・・子どもたちのように生きることができたら、どんなに人間らしいかをつくづく思う。

[感想14] 子どもと一緒に時間を過ごす時、いろんなことを感じ、学びとることができることは素晴らしいことだと思う。いろんな規則に縛られている私たちにとって、子どもたちと遊んだり、自然に触れ合うなどの心のゆとりを持つことは大切なことだと思う。子どもの世界は本当に広いんだろうなあと思った。私も今の頭の中に入っていることを空っぽにして子どもに戻り、自由な時間を過ごしてみたいと思った。また子どもと触れ合ったり楽しみながら、子どもの素晴らしさを発見できたらいいなと思った。(虫とり)

[感想15] 子どもは本当にすごいと思った。花びら一枚にさえ自分の身体や心全部を注ぎ込んでいるようだ。どんな小さいものにも、いつも真剣だ。美しい花を見ると大人も「美しい」と思う。けれど子どもの感じる「美しい」とは違う。子どもは美しいと感じた時は、心や身体全部で美しいと感じ

取っている・・・私はこの子どもの感受性みたいなものに感動した。(花びら)

これらは、子どもの世界の発見である。現実と想像が同時進行している世界(感想13)、とらわれのない自由な世界(感想14)、心や身体全体で感じとる世界(感想15)である。感想13では、子どもの世界はおとなの心を癒す力を持ち、そのような生き方は「人間らしい」ととらえている。このような子ども観は、観念として理解するのは難しいが、子どもの世界を共に生きた筆者の「語り」によって、学生らに伝えることができたと考える。

d. おとなのかかわり

[感想16] 子どもが友達と上手に遊べる－これは大人が子どもを受け入れることが関係していることを知った。大人に拒み続けられた子どもは友達と交わることはできない。同じ知恵遅れの子でも、受け入れられた子の方が、他の人と交わることができることを知った。どれだけ大人が子どもに愛情を注ぎ受け入れることができるかで、子どもの人格や社交性が変わることを学び、改めて養育者、保育者の存在の重要性を学んだ。(差し出すこと－受けとること)

[感想17] 子どもと接する時、子どもがしたことを大人の基準に合わないからといって受け入れないと、子どもはその存在自体が否定されたと感じ、子どももまた他人の存在自体を否定するようになってしまう。そうならないよう、子どものしたことを肯定的で温かい目で見守っていくことが大切だと思う。

感想16と17は、子どもを受容するという保育者の根本的姿勢に気づいたものである。子どもを受容する姿勢を持つことが大切であること、またそのことが子どもの中に他人を受容する力を育てることを学んでいる。

[感想18] 子どもとつきあうことが、こんなにも難しく悩むことだとは思ってもいなかった。子どもと同じレベル、価値観で対等に応対することにより、初めて心の通い合いができる。この場合は、子どもと砂まみれになることにためらい、差し控える気持ちが生じることにより子どもとの距離が開いてしまった。(子どもとの間で何をたいせつにしたいと思うか)

[感想19] 私は保母を目指す一人として、子どもに対してどういうふうに関わり、どう育てていくかという風に、子どもの先に立つことばかりを一生懸命考えていた。でも実際に大切なのは、子どもの後からついていくこと、つまり子どもの中に自分で抱負を持って何かをしようとする心を育てることである。子どもの後についていくことのほうが、保育の基本的な心情である、ということをお心にとめておきたいと思う。(先に立っていくことと、後からついていくことと)

感想18と19は、子どもとおとなの位置関係について述べている。18では対等な関係、19ではおとなが子どもの後からついていくような関係である。19は特に子どもの育つ力をおとなが背後で支える＝子ども主体の保育観を学び得たものであると考える。

[感想20] 遊びの中で自然に物事の原理を理解していく子どもたちの能力にとっても驚かされた。偶然の機会であるが、その中で貴重な体験をしていることが多いので、それに気づき思いきりやらせてあげることが重要であることに気づかされた(袋を割ること)

[感想21] 子どもは些細なきっかけで、大人の考えつかない高度な遊びを可能にすることを学んだ。大

人がどのくらい広い知識を持つかによって、子どもの不可解な行動を把握することができると思った。常に大人の考えを押しつけるのではなく、子どもの行動を素早く理解し、対応も早くすることが必要だと思った（袋を割ること）

感想20と21は、遊びにおける保育者のはたらきについて述べている。まず子どもが遊びの中で物事の原理を理解し、高度な学習を行っていることを発見している。このような子どものあそびを支えるためには、思いきりさせてあげること、おとなの考えを押しつけないこと、子どもの行動に即した対応を素早く行うことが大切であると学んでいる。

2. 『ウォーリーの物語』

この本の中で選ばれたテーマは、多いもの順に「願いごと」（37人）、「魔法」（34人）、「誕生日」（31人）、「あかちゃん」（24人）、「バレンタイン」（23人）他であった。『ウォーリーの物語』では、子どもの想像力について書かれた感想文が多かった。その中で比較的多く見られた感想を紹介したい。

〔感想22〕

初めてこの本を読んで、理解するのに苦労しました。何回も繰り返して読まないで、何を言っているのかよくわからなかったけど、読んでいくうちに子どもたちの気持ちが何となくわかったような気がしました。

「どろぼう」では、子どもたちのどろぼうに対するイメージがあんなにふくらむものかと驚きました^①。特に印象に残ったのは、教師の「どろぼうは、豆を取っていつてどうするの」という質問に対し、「ううん、もしかして誰かをだますつもりなのよ。豆を庭に植えて花が咲いたら、みんなどろぼうのこといい人だなんて思っちゃうでしょ」と答えたところです。そんな考え方もできるのかと感心させられました。イメージをふくらませ、自由に想像することは本当にすてきなことだと思いました。この会話を読んでみると「どろぼう」の物語がたくさん出てきそうな感じがしました。子どもは本当にすばらしい作家だと思いました。「願いごと」では、この会話を見ていると、なんだか本当に願いがかなうような気がしてきました^②。・・・

神様や妖精は、子どもたちにとってすてきな夢を与えるかけがえのないものだということが分かりました。同時に悲しい心を癒し、慰めることもできるすごい存在なのだなあと思いました^③。・・・

私の考えつかないようなことばかり子どもたちは話しているので、本当にすごいと思います。子どものこのすばらしい力をもっと引き出してあげられるようこれから頑張ってたくさん学び体験していきたいです^④。

(1)のように、ほとんどの学生が、おとなとは異なった子どもの想像力の豊かさに驚いたという意見を述べている。(2)では非現実を現実に変える物語の語り手として、子どもの存在をとらえている。(3)では、神様や妖精などの超自然的な存在の役割、すなわちファンタジーの役割について述べている。(4)では、以上のような特性を持つ子どもの力を引き出す保育者の重要性を認識している。では、これから学生たちの感想文を3つの観点－ a. 幼少体験の回

想、b. 子どもの思考（想像力）、c. 保育者の役割で整理し、代表的なものを紹介していくこととする。

a. 幼少体験の回想

[感想23] 私も小さい頃は、願いごとは1つしかかなわないと思っていたし、また誰にも言うてはいけないというルールを勝手に決めていて、それができると神様がかなえてくださるのだと考えていた。

（願いごと）

[感想24] これを読んで、小学校の頃、月に向かって3回言って願いごとをしていたのを思い出した。「キレイになりますよーに」とか「早く走れますよーに」とか、色々心配ごとや悩みごとを月に向かって言い、落ち着いていたと思う。（願いごと）

感想23、24のように、願いごとの儀式は、文化が異なっても幼児期の共通体験であるのは興味深い。

[感想25] 子どもの頃、両親が自分の考えていることをすべて見通していた。すごく怖くて、嘘をつけなかった。神様が自分の心に入って親に伝えていると思っていた。子どもの頃は不思議なことだらけで、早く大人になりたいと思っていた。今自分の幼少時代を振り返って、理屈では通らない考えがいっぱいあって、これから先生になって子供たちの考えを理解してあげられるか不安になった。

感受性の強い子どもの場合、神様が自分の心に入って親に伝えているというような想像力を働かせ、問題解決の手掛かりを見つけているのかもしれない。幼児期は未知の経験が多い分、不安を感じている子どもがいることを忘れてはいけないのだろう。

b. 子どもの思考（想像力）

[感想26] 子どもと聞くと「無邪気・素直」という言葉が真先に思い出される。だから私は子どもとは何も考えずに単純なものであると思っていた。しかしこの会話を読んで、子どもは子どもなりにいろいろ考え、想像し、自分の意見というものをしっかり持っているものだということを学んだ。この本を読んでみて、子どもには大人にはない子どもの世界みたいものがあり、大人には決して想像できない話の内容のおもしろさ、意外さ、深さに驚いた。

[感想27] 子どもっておもちゃ箱みたいだなあと思った。次から次へ私たちがワクワクするような考えが出てくるなんてすごいなあと思う。一般常識や概念にとらわれることなく気持ちを言えるなんて、なんだかうらやましいような気がする。（バレンタイン）

[感想28] すごいと思ったのは、「ハートはその人にちょうどいい音でどきどきするの」という言葉である。私たち大人で誰がこんなことを考えるだろう？理論には一つも反していないし、正しいことをこうまでロマンチックに言える子どもが羨ましい。（バレンタイン）

[感想29] 子どもたちは経験に密着した話になると、少しずつ論理的になっている。それで子どもは経験によって真実を認識し、理解していくんだと思った。

[感想30] 子どもはあまり多くのことを知らない。そのために何事にも恐ろしく感じたり、不思議に思うことがあったり、大人よりも考えているのではないかという気がしてきた。

[感想31] 自分の知っているできる限りのものをつないで自分の考えを言えるなんて、こんなすごい

保育者養成における「物語る」ものとしての実践記録の有効性を探る

ことが子どもでもできるんだなあと思った（砂糖）

[感想32] 子どもというのは、自分のイメージや希望、願いを中心に考えを作っているんだなあと思った。だが、5、6歳と年齢が高くなるにつれ、そういう考えを作っている、徐々に大人の世界で要求される考え方に目覚めてくるということも分かった。（赤ちゃん）

[感想33] 子どもが想像したものは、すべて子どもたちの世界では現実になってしまうのだということがわかった。そして子どもたちの想像の世界には、限界と言うものがないのだと思う。

これらは、どれもおとなとは異なった子どもの思考の働きを発見し、その可能性に価値を見いだしている。一般常識や概念にとらわれないユニークな考え方ができること（感想26、27）、知識の量が少ない分、感性の研ぎ澄まされた言葉を生み出すこと（感想28）、経験に基づいて認識を深めていくこと（感想29）、知っていることをつじつまを合わせて自分の考えを述べること（感想31）、現実と想像の境界線が曖昧であること（感想32、33）、である。特に感想26と30と31は自分の子どもに対する見方が改まったことを示している。

[感想34] 想像力を持つ子どもは、教育者にとってとっても手間がかかる存在である。しかし子どもにとっては頼もしい存在になるし、見方を変えることにより、本来の子どもの姿を見ることができると（ウォーリー）

（ウォーリー）

[感想35] 子どもがつくる物語の筋は、一見簡単そうで奥が深い気がする。普段の子どもの生活があるようだ。物語を聞く上で、今の心情を理解することができるかもしれない。おもしろいなと思った。

（引っ越し）

ウォーリーは、想像力の豊かな子どもで、前の保育園では落ち着きのない「悪い子」と評価されていたが、ペイリーはこのようなウォーリーを元気づけようと彼の語った物語を劇にすることを考える。このことがきっかけとなって、子どもたちが作った物語を次々と劇にすることで、彼らは自己を表現する機会を与えられ、有能感や満足感を覚えながら仲間とのつながりを強めていったのである。想像力のある子どもはおとなの都合から問題視されることがあるが、子どもが自分らしく生きることにつながるのではと述べている（感想34）。また子どもがつくる物語の中にその子を理解する手掛かりがあることを発見している（感想35）。

[感想36] 神様、妖精、魔術師、魔女、目に見えないものでも子どもたちは信じている。その考え方には、ちゃんと筋が通っているから不思議だ。納得させられることが多い。想像力が豊かだなあと感心するが、ここまではっきり言い切っていると、ピーターパンの物語のように、やはり子どもには見えるのかなと信じたくなる。実際子どもの頭の中には、そういう世界が見えているのだと思う。大人だって見えるはずだが、ただ余計な概念や知識が邪魔するだけ。（妖精）

感想36は、超自然的な存在を子どもが信じていること、その考えにはきちんと筋が通っており納得の行くものであることを気づいている。おとなが信じることのできないのは、概念や知識が邪魔するためであって、子どもの考えを信じたいとする学生の気持ちが表れている。

c. 保育者の役割

[感想37] この話を読んで、子どもたちと先生の考え方には違いがあり、先生の考え方を押しつけては

ポーター 倫 子

いけないと思いました。子どもたちの中には子どもたちなりのルールがあり、自分たちで解決する力もあり、それは先生の考えた解決法を行うより、よほど子どもたちには意味のあることになると思いました。(ジェラシー)

[感想38] 「まだ子どもにはわからない」とか「大人になったらわかる」などと決めつけず、子どもの思っていることを1から10で聞く姿勢が大人には必要だと思った。子どもの持っている世界はほんとに無限大だ。答えが決まっておらず1つじゃない。・・・私は、子どもたちの無限大の世界をもっともっと見てみたいと思った。

[感想39] 会話中では、先生は疑問形が多かった。それに自分の意見を押しつけず、子どもの意見を尊重していたのが印象的だった。

[感想40] 子どもは誕生日に成長すると思っているなんて、ビックリした。この物語の先生は、子どもたちの考えを「それは違うよ」とは言わなかった。そういう発想から子どもはいろんなことを考え出す。全て正しいものに直すことは、想像力を育たなくしてしまう。子ども独自のユーモアがなくなってしまう。けれど保育者というのは、見ていてだけでいいのか？間違っていることは正さなくていいのか？どういうときに正すのか？どういう時にそのままにしておくのか？疑問が生まれた物語だった。

(誕生日)

[感想41] 子どもにとって大人の言うことは、絶対的権威があると思う。だから子どもが自分なりに想像したり考えたりする前に、大人が答えを言ってしまったら、単に知識として頭に残るだけだろう。幼児期はそのような知識を得る時ではなく、遊びや見たもの、聞いたものから想像していく時だろうと思う。

感想37から41までは、保育者とは自分の考えに固執したり押しつけることなく、子どもの考えに謙虚に耳を傾けるべきであると述べる。それは子ども自身の成長する力を信じることでもある(感想 37. 38. 40)。しかし子どもの考えをそのまま放っておいて良いのか、おとなの考えをどの程度子どもに伝えていくべきかという疑問も生じている(感想40)。

[感想42] この物語に出てくる教師のように、対子どもではなく、対一人の人間として保育していけるような保育者になりたいと思う。

[感想43] 良いこと悪いことについては、大人の反応が子どもにはとても大きな影響を与えることが分かった。大人の表情や、声、言葉の調子、罰を与えるときの道具など、子どもは大人にとっても敏感である。良いことも悪いことも大人の反応次第で決まってしまう。(良いこと悪いこと)

感想42はペイリーの保育者としての基本的姿勢への共感である。感想43は、子どもの善悪の認識はおとなの出方で決まる場合が多いため、自分の行動に敏感にならなければならないとする警告である。

V. まとめ

保育者養成における「物語る」ものとしての実践記録の有効性を検討した結果、次のことが分かった。

1. 『保育の体験と思索』と『ウォーリーの物語』は、学生が幼少の頃の体験を回想する上で有効な教材である。特に『保育の体験と思索』は、子どもの時体験したことを感覚的に思い出したり、その時の心情を振り返るきっかけにつながるようである。幼少時代の体験は、将来学生たちが子どもの心持ちを理解していく上で重要な手掛かりになると考えられる。

2. 『保育の体験と思索』と『ウォーリーの物語』は、一人の人間としての子どもを発見することにつながったようである。子どもの可能性や素晴らしさを発見し、その中から学ぼうとする姿勢が伺われた。また、子どもと関わっていく中で、おとなの概念や常識にとらわれず、子どもの視座に立つことの大切さも学んでいる。

3. 『保育の体験と思索』は、子どもの内面を理解していく重要性に気づく上で有効である。子どもの描いた絵にその子どもの内面の感情が表れていることに興味を持ったり、自分も子どもの気持ちを分かるようになりたいという願いを持つ者もいた。子どもの行動は全て意味があることを知り、それらを理解しようとする態度を養うきっかけとなったように思われる。

4. 『ウォーリーの物語』では、子どもの想像力について認識を深めるきっかけとなったようである。文化の違いが表れたところもあり(キリスト教の世界観、歯の妖精等)、日本の子どもにはこのようなファンタジーは見られないのではという意見もあった。日本の子どもには日本なりのファンタジーがあること、ペイリーの関わりによってそのクラスの子どもの想像力が育っていることなどを学生たちに伝えておく必要があるだろう。子どもは自分なりの意見や論理性を持ち、仲間と意見を出し合いながら解決を探っていく力を持つことを学んだようである。

5. 『保育の体験と思索』と『ウォーリーの物語』に登場する保育者は共に子どもの思いや考えを尊重し、子どもへの関与は最小限に止めている。子どもの世界を壊さないように細心の配慮を払っている。そのような保育者の姿勢から、子どもを尊重する保育の在り方について学びを深めた者は多い。また当事者である保育者の思いが含まれている記述から、保育行為の背後にある保育者の意図を知ることにより、保育者のかかわりについて具体的な理解を深めることもできたようである。さらに、保育者の心のゆれや悩みに共感し、保育とは、子どもと保育者が共に育ちあっていくものであることを認識した者もいた。

以上をまとめると、「物語る」ものとしての記録が、学生たちの子ども理解や保育理解に有効であることが分かった。今後の計画としては、学生たちの感想文をプリントで紹介し、互いの考えから学ぶ機会を与えていきたい。これからの課題としては、私自身が語り手として、講義の中で保育を物語るができるように、自己研鑽を積み上げていきたいと考えている。

文 献

- ヴィヴィアン・ペイリー著 ト部千恵子訳 佐藤学監修 ウォーリーの物語－幼稚園の会話 世織書房
1994年
大場幸夫 「子どものストーリー」保育心理学II 子どもと保育 大場幸夫・前原寛編著 東京書籍
1995年 p.24-5

- 大豆生田啓友 「保育を「物語る」動機性としての「痛み」について」 日本保育学会第47回大会研究論文集 1994年
- 大豆生田啓友他 「保育の物語を探る事例研究の試み(1)(2)」 日本保育学会第48回大会研究論文集 1995年
- 河合隼雄 物語と人間の科学 岩波書店 1993年
- 斎藤こずゑ 「発達を見る目をいかに見、語るか」 発達 N.64 V.16 1995年
- 佐藤学 「「出来事」の省察と批評の場としての教室＝臨床的経験による実践的研究＝」 日本保育学会第48回大会企画シンポジウム「臨床としての保育を問う＝発達観の転換」1995年 発表資料
- 角尾和子 「保育観の転機とその契機を探る(その2)－教授法研究のために－」 日本保育学会第42回大会研究論文集 1989年
- 津守真 子ども学のはじまり フレーベル館 1979年
- 津守真 保育の体験と思索－子どもの世界の探究 大日本図書 1980年
- 友定啓子 「保育記録論－保育者による幼児の行動の記述」 山口大学教育学部紀要 V.41 Pt.3 1991年 p.291-7

註

- (1) 「臨床としての保育を問う－発達観の転換」(日本保育学会第48回大会 企画シンポジウムⅢ 1995年)の中でもこのテーマについて論議されている。
- (2) 「[[特集] 物語るものとしての保育記録」(発達 N.64 V.16 1995年)を参照。
- (3) 養成校カリキュラムの中で同テキストを教材として使用した例としては、角尾(1989)による学生の保育観変容の契機を目的としたものなどがある。学生がその環境で培われた「指導主義」の保育観から「子ども中心」の保育観へと変容を促すための教授法の一環として試みられている。